

限りなき消滅を繰り返し／光は届き続ける

岸俊太朗

夜波に浮かび、確かにそこにあつたものに思いをはせたとき、背伸びしがちな我々の生活についての論証は破られる

なにもかもがやぶれかぶれの世界のなかでも確かに自分を失わずに、ただ、

私、私、私

それがずるいというのか、したたかだというのか

一方で、古来より伝承されし獣たちは私たちをいかすか、殺すか

魂の根幹をなすのはそれらの歴史か、私の足跡か、それとも、私たちの未来か、或いは

無の中に夢を見つける

もともと形がないから、だからこそ型を求めてきたんだろ

しらばつくれる生命の声は、私たちには何の意味もなさない、なぜなら、なぜなら、私たちはいま生きているから

私たちが生きているということ、それが

たとえ無だったとしても、たとえ夢だったとしても、たとえただの歴史になろうとも、変哲のない未来になろうとも

それでもともと、それでもあそこで見たたった一粒のために、（それはいつもそばにあるが）手を伸ばし続けろ、たとえ消えてもそれからが

とどけ、とどけここにあるすべてのあなたとわたしと、そして、いつかきつとは、いつも

煌めきたる命、爆ける花火のような、壮大で危険であるような美しいような

そういった曖昧さをもって私たちは今もお、あなたを想っています

きつと、いつかきつと、夜の海の中でも、朝の太陽の方角にも、麦の畑の黄金のあたたかさに抱かれ、あなたの手のぬくもり、私の身体のなか、魂に与えられたすべての物質、怒り、苦難、悲劇、いくつもの涙のあと、覚えてい